

久 保 貞 (くぼ ただし)

大正11年(1922)7月北海道札幌市に生れる。昭和21年9月北海道帝国大学農学部卒業。昭和26年9月北海道帝国大学大学院修了。昭和28年10月京都大学大学院退学。昭和35年3月林学博士(北海道大学)。昭和30年6月浪速大学農学部(現、大阪府立大学)助教授、昭和36年大阪府立大学農学部教授、昭和61年4月大阪府立大学名誉教授。昭和61年(㈱)景観設計研究所取締役会長。以上その他、日本造園学会副会長、日本造園学会関西支部長、IFLA(国際造園会議)日本大会組織委員会副委員長などの要職を歴任。また、兵庫県都市計画地方審議会委員や大阪市土地利用審査会委員、神戸市公園緑地審議会会长など地方公共団体において都市計画や地域計画また緑地計画の専門家として活躍し、多大の貢献を果たした。

大学卒業後は、昭和61年3月大阪府立大学で定年退官を迎えるまで、研究者・教育者としての道を歩み、多くの門弟を官界、学界、民間関係分野に送り出したし、専門領域の発展と拡大に情熱を捧げた。

三十有余年の大阪府立大学在職中、昭和39年に緑地計



安 部 大 就

(大阪府立大学教授)

画工学講座を創設し、今日の緑地計画分野の礎を築くとともに、造園分野に留まらず、建築・土木・都市計画など諸関連分野との協同作業(コラボレーション)の重要性を主張しつづけ、環境計画的立場で活動。

永年の学術研究の中心は、自づから確立した計画技術(Planning Technology)を基調とした「緑地計画工学」を基本としたもので、あらゆるスケールでの緑地空間の場の特性として、人間と環境との相互依存関係から人間の反応行動が決定されという場の理論から展開された一連の研究が高く評価されている。都市や地域の開発・保全などに関わる計画過程で、物的側面に加えて、社会的、心理的、生態的諸側面からの諸事態を動的に把握することを示したサイクル理論は、今日の緑地計画・景観計画における複雑な事態を明確化する際に有効な示唆を与えている。

平成2年6月9日未明、発病以来の闘病の甲斐なく永眠。享年68歳。天与の洞察力と判断力をもって、国内外での活躍がまだ期待されるなかでの逝去、惜しまれて余りあるものがあります。ご冥福をお祈りいたします。